共通教育について語り合う会「フクトーーク」
平和について語ろう

大学教育センター　津田　将行　　佐藤　嘉晃　　日暮　美紀

1. はじめに

現在、日本や世界を取り巻く課題として、国際化、SDGs、環境問題、情報通信技術の発展、少子高齢化、及び地域格差などがある。これらの課題は、様々な要因によって大きく変化することで、これまでの常識が通用しない、不透明で、予測がつかない社会へと進展している。そのため、学生には、幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて、これまでの社会の在り方に付加価値やイノベーションを生みだし、新たな社会を創造していく人材となっていくことが求められている。特に、国際的視点を持ち、個人や社会で多様性を尊重しつつ、他者と協働して課題解決を行うことができる力を身につけることが求められている。

本学の共通教育でもこうした高い見識と豊かな人間性を培い、諸問題の課題を解決するスキルを大学時代に身に付けるために、時代に合わせた充実した教育を目指し、その達成に常に邁進し続けている。

本学では、学修の主体者である学生が参加して、魅力的な授業や学修支援の在り方を議論し、発表する、企画提案型の意見交換会「フクトーーク」が開催されている。この「フクトーーク」では、共通教育での学び方、学びたい科目やテーマ、学修支援のポイントなど、学修成果が期待できる様々な工夫やアイデアに関する語り合いを通じて、魅力的な授業内容･方法や新しい学びを取り入れ、共通教育の一層の充実が目指されている。共通教育には、初年次教育科目、共通基礎科目、教養教育科目、及びキャリア教育科目が該当する。

2. 令和 7 年度におけるテーマ設定に関する経緯

これまでに「フクトーーク」では、語学教育科目、e ラーニング、教養ゼミ、教養講座、学修支援相談、教養教育科目 B 群、C 群、D 群、E 群、F 群、およびインターンシップをテーマとしてきた。

本学では、学生の共通教育に対する現状把握と質の向上を目的として、共通教育科目の受講生が多い 1 年次を対象として、毎年、共通教育アンケートを実施している。

過年度にあたる令和 6 年度共通教育アンケート(1)の中で、設問「共通教育科目で充実していると思われる科目群」に対する回答結果を図-1 に示す。この結果から共通教育科目の中で充実度の割合が一番高いのは「英語」の 20.4%、次いで上位から順に「ドイツ語・中国語・フランス

T=886、N=397 人(複数回答)

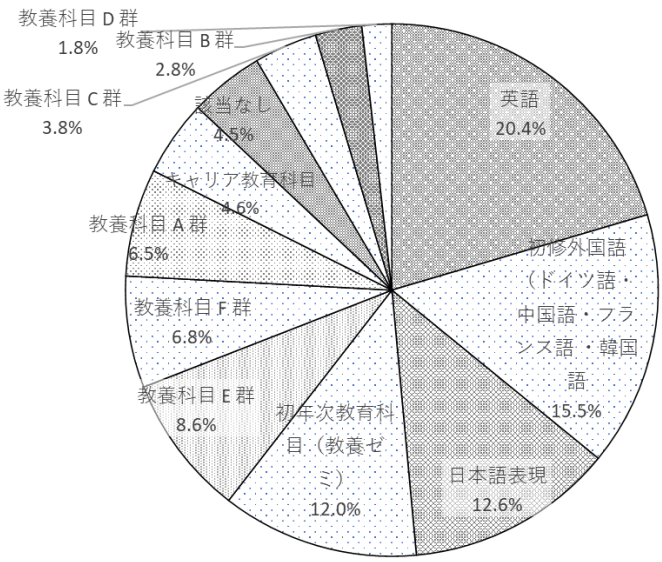

図-1 共通教育科目の充実度の割合

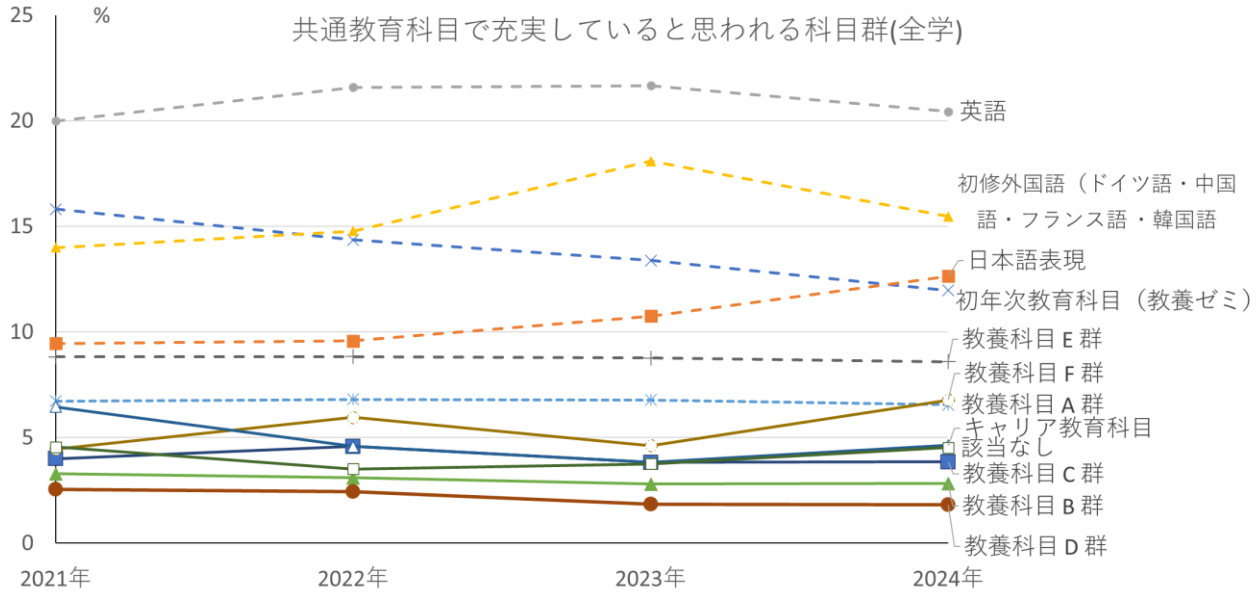

図-2　共通教育アンケート　「共通教育科目で充実していると思われる科目群」の結果（経時変化）

語・韓国語など初修外国語」15.5%、「日本語表現法」12.6%、「初年次教育科目（教養ゼミ）」12.0%であった。このことから、語学系科目、及び教養ゼミに対する充実度の割合が高いことがわかる。これに対して、充実度が一番低いのは、D 群「思索と創造」1.8%、次に B 群「社会構造と生活」が 2.8%、C 群「歴史と文化」が 3.8%である。この共通教育アンケートは毎年実施されており、同じ質問項目に対する 2021 年から 2024 年までの結果の経時変化を図-2 に示す。教養教育科目 D 群、B 群、および C 群に対する充実度の割合は、この 4 年間全ての期間において低いことから、早急なる改善が必要である。従って、今年度の「フクトーーク」においては、2021 年のテーマであった「教養教育科目 D 群思索と創造」を再度、主なテーマとして、意見交換を行うこととした。

D 群の学習目標は「心と思考の仕組みを理解し、人として生きる意味と人間性を培う意義を深く捉えて豊かな品性と不屈の精神を養い、道理を実践する力を伸ばす。」である。前回、「教養教育科目 D 群」をテーマにした時は「思索」と「創造」に焦点を当て、学びたい科目や学ぶ意義について意見交換し、授業提案を行った。そこで今回は、上記学習目標の「心と思考の仕組みを理解し、人間性を培う意義」に着目した。現在、国内の課題に目を向けると、地域コミュニティの希薄化により、相談や支援の機会が減少し、精神疾患の外来患者数は 2002 年の約 224 万人から、2020 年には 586 万人に急増しており、若者の孤独感や高齢者の孤立、特に若年層の心の健康問題が指摘されている。また、SNS やオンライン文化の普及により、表面的なつながりが増える一方で、親密な人間関係構築の困難さ、情報過多による思考の混乱、フェイクニュースによる認知の歪みも問題となっている。

さらに国際情勢に目を向けると、ウクライナとロシアの戦争は依然として終わりが見えず、またガザ地区ではイスラエルとパレスチナの衝突が続いている。アメリカにおいては、トランプ大統領が「アメリカ・ファースト」という考え方のもと、「アメリカをもっと強く、豊かにしたい」という思いを持って、さまざまな政策を行っている。これは、他の国よりもアメリカの利益を大切にするという意味で、国内の工場や仕事を守ったり、外国からの輸入品に高い関税をかけたりする政策につながっている。また、外国から入ってくる人（移民）についてのルールも厳しくしようとしており、その結果、アメリカと他の国との関係性が変わったり、アメリカ国内においても意見が分かれたりしている。世界情勢はこのようにまさに複数の地域で緊張や変化が続いている。

緊張とは心や身体が張り詰めた状態である。国際関係や対人関係における緊張は、相互の関係を悪化させ、争いが起こりやすい不安定な状態を形成する一因である。人と人、国と国の考えや性質が異なることにより生じる緊張状態の仕組みを理解し、その緩和や解消法、緊張状態のない在り方を議論

し模索することは、D 群の学習目標の一部である「心と思考の仕組みを理解し、人間性を培う意義」に資するものである。より具体的には、「緊張した状態がなく、衝突が起こらない、良好で安定な状態が継続している」という状況を「平和」と位置付けて、今回の「フクトーーク」では、「平和について語ろう」をテーマとして、心理的、歴史的、文化的、地球環境的観点から、学生の思いやそこで学びたい事柄、さらには学修内容の充実につながるような授業方法等についてグループ内で意見交換を行い、大学へ提案することにした。

3. フクトーークの実施方法

(1)参加希望学生の募集、及び参加登録について

今回は、2025 (令和 7) 年 10 月 23 日から 11 月 19 日の期間に参加学生を募った。告知は以下の 3 種の方法で行った。1 つ目は学内にポスターを掲示した。2 つ目は本学の学生ポータルシステムである Zelkova による告知を行った。3 つ目は各学科の教員や共通教育科目担当の教員から授業などを通じて連絡した。

また参加登録は、Microsoft の Forms を使用し、参加希望学生には、学生番号と氏名を記入してもらった。

(2)事前説明会の開催

2021 (令和 3) 年度から「フクトーーク」の事前説明会を実施している。目的は、①スモール･グループ･ディスカッション (以後、SGD とする) での対話の時間を十分にとるため、②学生に議論のテーマについて説明を行い、当日までにテーマを深く考え内容を整理してもらうとともに、そのヒントとなる資料を提供するため、③当日の SGD の方法、進め方を理解するため、の 3 点である。今回の事前説明会は、2025 (令和 7) 年 11 月 20 日（木）12:30～12:50 に 7 号館 2 階のプロジェクトラウンジで実施した。

(3)フクトーーク当日、及びグループ分け

「フクトーーク」は、2025 (令和 7) 年 11 月 26 日 (水) 16:30～18:00 に、大学会館 3 階 CLAFT 教室で実施した。当日の参加学生数は 17 名、1 グループを 4 名から 5 名とし、4 グループに分かれた。

(4)進め方

当日は図-3 に示すフレームワークへ書き込む方式で SDG を行い、その後、発表を行った。フレームワークでは、まずは「「平和」に対するイメージ、知識、体験とは」と題して、心理的、歴史的、文化的、地球環境的な「平和」について個々のそれぞれの思いや考えを出し合ってもらった。次に、「「平和」に関して、どういうことを知り、学びたいですか。」と題して、新規科目として学びたい事柄、授業内容について提案してもらうこととした。

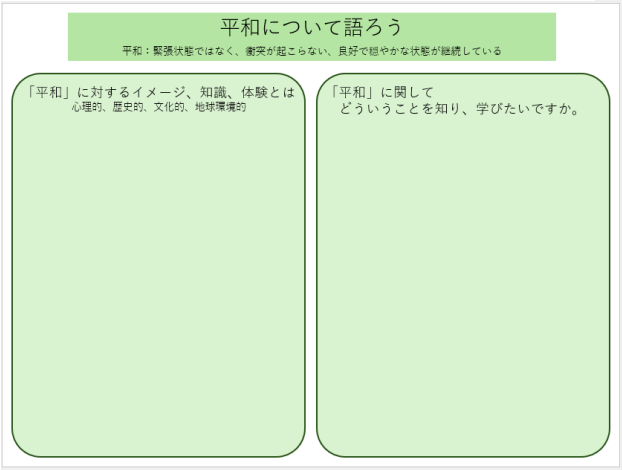

図-3　SGD で使用したフレームワーク

4. 各グループからの提案

前述したように、グループ数は計 4 グループであるが、「平和に対するイメージ、知識、体験」に対する問いについては、各グループでほぼ同じようなキーワードがでていた。その一例として、「平和」をポジティブとネガティブに分け、ポジティブな意見としては、自由、笑顔、笑える、嬉しい、明るい、心に余裕がある、自然、個性を認め合える、信頼性がある、治安が良い等があった。これに対してネガティブな意見としては、不安、心配、ストレス、戦争、武力による押さえ込み社会、独裁的な政治の仕組み等があった。これらをもとに、「「平和」に関してどういうことを知り、学びたいかですか」の問いについて、グループ間で共通・関連する事項があるため、グループ毎ではなく提案事項毎に以下に記す。

「国家や社会に対する平和」に関して、海外の警察の信頼度は日本の警察の信頼度よりも低く、そのため治安があまりよくない。また国を統治する主権者や権力者が独裁的な思考になると、国は分析し、平和が根幹から崩れる。このことから、日本の治安、選挙、政治の仕組みを知りつつ、海外の治安、選挙、政治の仕組みを知り、比較することで、両者の違いを理解し、そこから導かれる形での「平和」を学ぶことを希望する意見があった。また、日本人の「平和」に対する価値観や「平和」の視点、海外の人の「平和」に対する価値観や「平和」の視点の違いについても理解を深めて考えることによって、紛争、内線、テロ、暴動、不公正な社会の発生要因とともに、それらの解決へとつながる学びを希望する意見もあった。

「統治者・支配者としての平和」として、国の統治者や権力者側視点の「平和」に対するスピーチから学び、また特に独裁的な人の思考や戦争へと進んでしまった時代背景についての学びを希望する声があった。また「公共・社会の平和」として、過去に事件や犯罪を起こした人に注目して、その人の性格、価値観等の個人的な要因と、家庭状況や孤立感等の社会環境的な要因との因果関係等を科学的知見から学びたいとする意見があった。

また平和学習について、広島は人類発の原子爆弾の惨禍の地であり、広島県内の学校では小学生からそのことに関する学習を受けている。しかし他の都道府県では、平和学習については、あまり深く学習することはなく、平和学習に対する地域間での隔たりが発生している。そこで、学修者の出身地が異なる場合が多い大学生がともに広島平和公園や原爆ドームを訪問したり、語り部の話しを聞いたりすることで平和についての学びを深めることができるとの意見もあった。

さらに「平和」についてより実用的・実践的な考えとして、「平和＝困っている人を助けたい」と定義して、そのための手段としての平和や平和につながるような行動を学習してみたいとの意見があった。

インドネシア出身の留学生を含むグループからは、インドネシアではイスラム教、キリスト教、ヒンドゥー教、仏教、儒教など様々な宗教が混在しているが、それぞれの宗教の信仰者達が互いに助け合いをして生活を営んでいる。「助け合える、話し合える、相手を認め受け入れる」ことで「平和」な環境を構築している。「平和」について講義形式での知識の伝播ではなく、他国の人と「平和」をキーワードとして対話形式での授業を実施することで「平和」についてより能動的な学修の場が提供できるのではないかという提案がなされた。

「個人の平和」に関して、近年、ストレスによって、心のゆとりや余裕がなくなり、うつ病等の精神疾患者が年々増加している。また、顧客が企業や従業員に対し、社会通念上許容される範囲を超えた理不尽な要求や迷惑行為を行うカスタマーハラスメントという言葉を耳にする機会が増えてきた。そこで、うつ病等の精神疾患やカスタマーハラスメントの現象や状況について学ぶとともに、その対策についての学びを希望する意見が出た。また、本学には構内の雑草の除草を目的にヤギが 2 頭いる。それに関連してか、ストレス解消を目的にヤギなどを用いたアニマルセラピーに関する心理的効果を学びたいとする意見も挙がった。

5. 参加学生の感想（アンケート結果）

「フクトーーク」終了後、参加者にアンケートを実施した。そのアンケートの結果について以下に示す。

まず、「フクトーーク」に参加するきっかけとしては、図-4.1「どのようにして知ったか？」のグラフが示す通り、「教員からの参加要請があったので知った」の回答が 65%と一番多く、次に「専門教育科目の授業中に教員からの広報で知った」の回答が 15%であった。また図-4.2「参加の動機」に関して、「教員（担任・学科教員）から参加要請で、内容に興味を持ったから」の回答が 45%と一番多く、次に「掲示などで興味を持ち、大学に自分の意見を是非反映させたいと思ったから」の回答が 27%であったことから、教員からの参加要請とともに、興味、関心を持てるテーマにより参加を決めた学生が多かったと考えられる。

次に、「フクトーーク」の実施に対する質問として、図-4.3「話し合いは有意義だったか？」では、「非常に有意義であった」が 82%、「比較的有意義であった」が 12%であり、2 つの回答を合わせと 94%になることから、参加学生が「有意義であった」と感じていることがわかる。また図-5.4「自分の意見が十分に出せましたか？」に対して、「十分に出せた」が 59%、「ほぼ出せた」が 23%と、これも

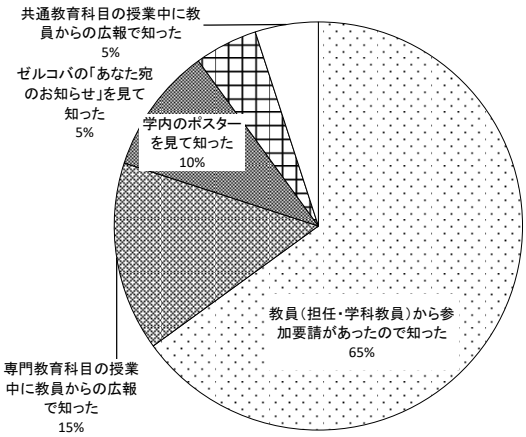

図-4.1 「フクトーーク」をどのようにして知りましたか。（複数回答可）

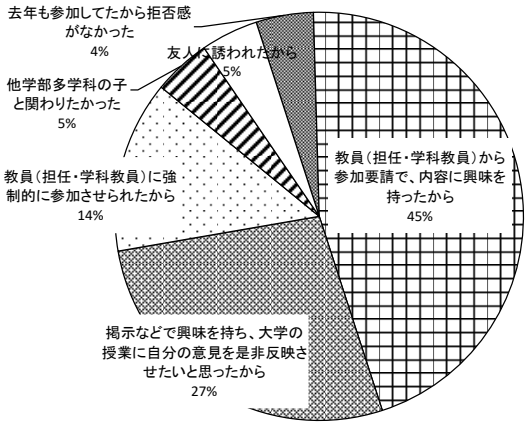

図-4.2 「フクトーーク」への参加の動機を教えてください。（複数回答可）

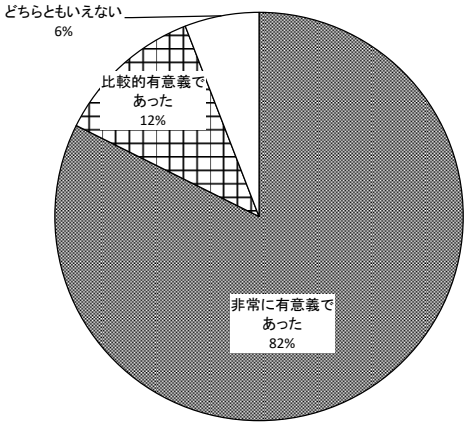

図-4.3 今回の「フクトーーク」の話合いは有意義でしたか。

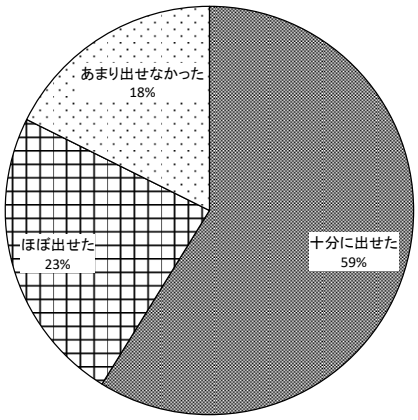

図-4.4 グループディスカッションでは、自分の意見を十分に出せましたか。

2 つの回答を合わせと 82%になることから、参加学生は比較的「意見を出せた」と思っていることがわかる。また図-4.5「ディスカッションの時間」に対しては、59%が「適切であった」と回答、29%が「もう少し長いほうが良かった」と回答、図-4.6「1 グループ当たりの人数」に対しては、88%が「適切であった」と回答していた。よって、グループ構成人数は 4 人の場合、グループ内で個々の学生はその場で意見が出せたと感じてはいるものの、より深い対話をするためには、もう少し時間が長い方が良かったと感じているということがわかる。

次に、今後の授業での実現性に対する問いとして、図-4.7「提案されたプロダクトの実現の是非」では、82%が「実現してほしい」と回答していた。また図-4.8「実現してほしい項目」として、「平和について話し合う授業」が 38%、「広島平和公園、原爆ドームでの学び」と「平和へつながる具体的な学び」がそれぞれ 15%ずつであった。

次に、このような取り組みに対する質問として、図-4.9「学生の意見を取り入れた新規授業の創出の取り組みは、今後も必要と思いますか。」において、94%が「学生の知的欲求を満たすためには、必要である」、6%が「学生の意見を反映させた授業内容の改善は必要だが、新しい授業を生み出す取り組みは必要ない。」と回答し、「今回のような取り組みは全く必要ない」、「分からない」へ回答はなかった。また図-5.10「次回の「フクトーーク」に参加したいか」という質問では、「是非参加したい」が 53%

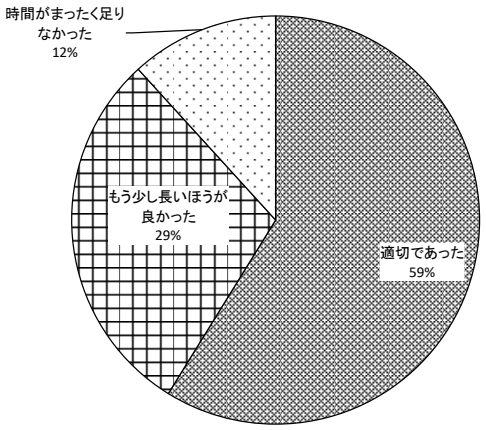

図-4.5 ディスカッションの時間は適切であったと思いますか。

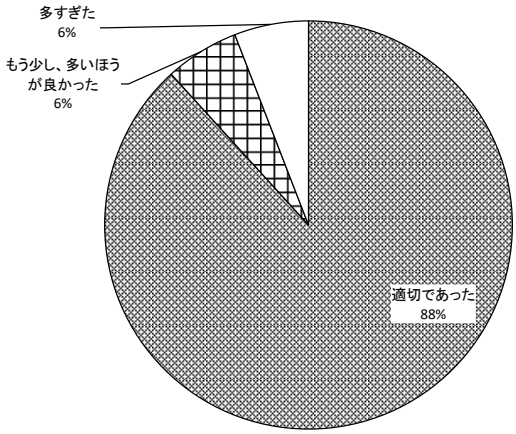

図-4.6 グループディスカッションの 1 グループの人数は適切でしたか。

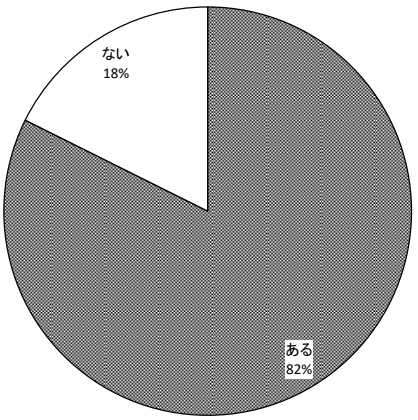

図-4.7 提案された項目の中で是非、実現してほしいものはありますか。

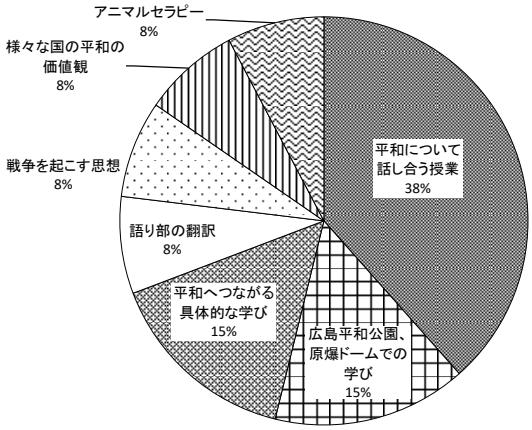

図-4.8 提案した中で実現してほしい項目はなにですか。

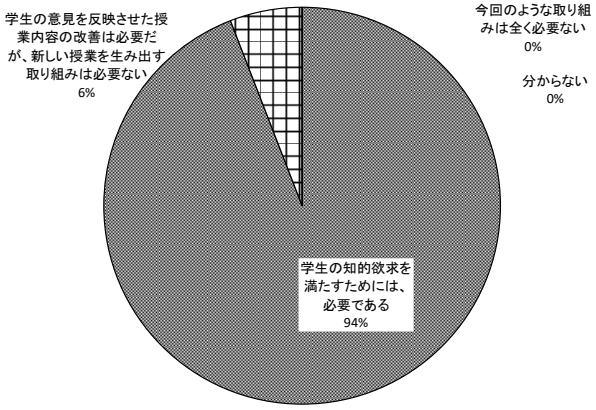

図-4.9 学生の意見を取り入れた新規授業の創出の取り組みは、今後も必要と思いますか。

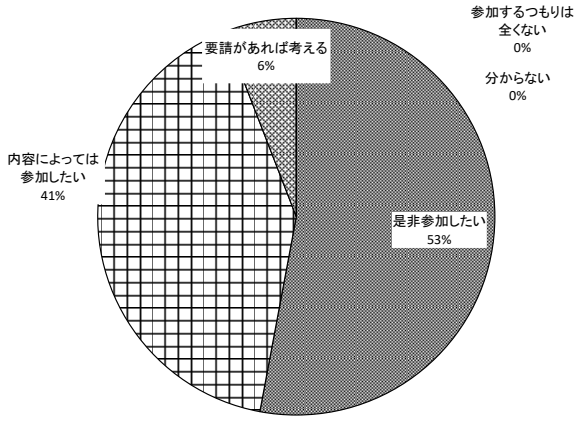

図-4.10 次回の「フクトーーク」に参加したいと思いますか。

表-1 「フクトーーク」に対する自由記述の結果

・色んな人の意見を聞けてより平和について深く考えることができてよかった

・色々な方と、なかなかない機会で話し合いができた点が非常に有意義な時間を過ごせました

・自分と違う年齢の人、他の学科、他の国の人と話す機会が楽しかった。

・普段話すことのない人たちと話すことができ、大変貴重な機会だったと感じました。

・少人数のグループディスカッションかつ否定的な意見がなかったのでとても話しやすく有意義な志願になった

・めちゃくちゃ楽しかったです！　また是非参加してみたいです！

で一番多く、次いで「内容によっては参加したい」が 41%、「要請があれば考える」が 6%であり、「参加するつもりは全くない」、「分からない」への回答はなかった。

さらに、表-1 には「「フクトーーク」に参加して、思ったこと、考えたこと、改善した方が良いことなど」を自由に記載してもらった結果をまとめてある。

「色んな人の意見を聞けてより平和について深く考えることができてよかった。」

「色々な方と、なかなかない機会で話し合いができた点が非常に有意義な時間を過ごせました。」

「自分と違う年齢の人、他の学科、他の国の人と話す機会が楽しかった。」

「少人数のグループディスカッションかつ否定的な意見がなかったのでとても話しやすく有意義な志願になった。」

「普段話すことのない人たちと話すことができ、大変貴重な機会だったと感じました。」

「めちゃくちゃ楽しかったです！　また是非参加してみたいです！」

等、グループディスカッションに対する高評価の回答が多く見受けられた。普段の授業では、このようなアクティブラーニング型はあまりなく、学生は、他者との交流、意見交換、及び課題解決型の授業を実施することで、他者との考え方の違い、自己の発見、及び意見に対する共感が得られたのではないかと推察する。

6. おわりに

令和 7 年度の「フクトーーク」では、「平和について語ろう」をテーマに、「平和」について心理的、

歴史的、文化的、地球環境的観点から、学生の思いやそこで学びたい事柄、さらには学修内容の充実につながるような授業方法等についてグループ内で意見が交わされ、大学へ提案が行われた。「平和」をキーワードとして、講師からの一方向の知識の教授のような授業ではなく、様々な学年・学科からの学生や留学生が参加して「平和について話し合う」対話型の学修、いわゆるアクティブラーニングによる学びの機会を提供する取り組みがますます重要になってくるであろう。それは、多様な価値観に触れながら平和を主体的に考える力を養うことができるからである。

謝辞：本行事の実施にあたり、参加してくれた学生、及び学生参加の告知等でご協力いただきました関係の多数の教職員の方々にここに記してお礼申し上げます。

以下に、当日の実施状況を示します。

ディスカッションの状況

学生発表

注

(1)　福山大学　大学教育センター　令和 7 年度　共通教育アンケート(1 年次)実施報告書、5 頁、https://www.fukuyama-u.ac.jp/education/edu-center/general-education-department/　実施報告書.pdf